

《第 490 回（2022 年 4 月 14 日） 子どもの本の読書会記録》 参加者：7 人

時間：10:00～11:30 場所：オーテピア 4 階集会室

『クララとお日さま』 カズオ・イシグロ／著，土屋 政雄／訳 早川書房

カズオ・イシグロが 2017 年にノーベル文学賞を受賞したことは、記憶に新しい方も多いかと思いますが。本書は、2021 年 3 月に発表されたカズオ・イシグロの最新作です。

主人公のクララは、人工知能を搭載した AF と呼ばれるロボット。人間の子どもの友達として作られた AF たちは、お店のショーウィンドウで、誰かが自分を買ってくれるのを待っています。ある日クララは、ジョジーという女の子に選ばれ、彼女の家に行くこととなります。クララは体が弱いジョジーを励まし、彼女が健康になるようお日さまに祈りを捧げます。しかし、クララがジョジーの家選ばれたのには、別の目的があったのです……。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

●カズオ・イシグロの作品は苦手。この作品は 2 回読んだけど、分からないところがたくさんあった。AF は人間の友達になるために作られたのに、ジョジーとクララの関係は全然対等じゃない。ジョジーの父親には共感できた。AF との関係や優性思想など、論点がたくさんあった。この本のような世界は、そう遠くない未来に来るのかもしれない。あと 3 回くらい読めば分かるようになるかもしれない。

●カズオ・イシグロの本は初めて読んだ。ストーリーに入り込みにくく、キャラクターにも共感しづらかった。雑誌を読んで情報収集する情報弱者なクララは、自分が持っている AI のイメージとかけ離れていて違和感を感じた。最後クララは捨てられてしまうが、子どもが大人になったらぬいぐるみを持たなくことと同じなのではないかと思った。この世界でクララは、高価なおもちゃのような存在なのかも。

●カズオ・イシグロの作品は映画で観たことがあり、映像美がすごい印象だった。この作品は、色んな社会問題が詰め込まれていて難しかった。「肖像画」と呼ばれるジョジーのコピーを作る計画には、衝撃を受けた。クララは魂を持たないけれど、登場人物の中で 1 番人間的で純粋だと思う。ところどころ出てくる美しい情景に癒された。映画化の予定があるそうなので、上映したら観てみたい。

●なかなか世界観に入り込めない作品だった。「ボックス」や「向上処置」といった言葉は、最後までイメージができなかった。物語の中でクララは一貫して優しく謙虚だが、それゆえに人間の身勝手さを強烈に感じた。クララが廃品置き場での生活を悲観視していないから、よけい切ない。クララが発する「お日さま」という言葉は、尊敬の気持ちがあふれていて、あたたかくて心地いい。

●自分が思い描いている近未来のイメージとのギャップを感じた。AF は子どもの友達となる役割を持っているらしいが、クララはジョジーの友達というよりお供。何事もジョジーを優先してきたクララが、最後はお役御免になるラストは辛かった。母親の計画は恐ろしいが、子どもを亡くすかもしれないと思う親の必死さを考えると、仕方のない行動なのかも。

●カズオ・イシグロの作品は少し苦手だが、この本は表紙にとっても惹きつけられて手にとった。ジョジーを救うために祈り続けるクララは、ジョジーの周りの大人よりも素朴な人間らしさがある。最後にクララの行き着く場所が廃品置き場だなんて！私なら、まだ意識？のある友人以上のクララをとっても廃品扱いはできないと感じた。そのくらい強く私の心の中にクララは入りこんでいた。

●一回読んだだけでは消化不良。特にラストが納得できない。ジョジーの死後を見越してコピーを作ろうとしているとわかってからは楽しめなくなった。子どもの向上処置にもゾツとした。ロボットに対する人間の態度も嫌。学習途上のためちょっとズレているクララが好きだった。初めて読んだカズオ・イシグロの世界。私には理解出来なかったが再読しようと思う。

次回 5 月 12 日（木）10:00～11:30 オーテピア 4 階集会室

□『春の日や庭に雀の砂あひて E.J.キーツの俳句絵本』

リチャード・ルイス／編，エズラ・ジャック・キーツ／絵，いぬい ゆみこ／訳 偕成社
申込み・参加費不要。新型コロナウイルス感染拡大の状況により、変更・中止となる場合があります。変更・中止については、オーテピアのウェブ・サイトにてお知らせします。